

病院船

病兵卒は病院船に移された。
風寒うして濤愈々高し。
船は内地へ内地へと走つて居る。

*
*
*
*
*
*
*

第三十一 再征上途

復隊

明治三十八年四月十一日、歸郷療養の期は満ちて、習志野の十
三聯隊に復隊した。
戦地で氣儘の生活に習ひたる身の補充隊の嚴格な四角四面
の喇叭生活は愉快で無い。
奉天戦に於ける戦友が、偉勳の報知は頻々と来る。
戦機愈々熟して、大戦又近きに有ると謂ふ噂だ。
早く往て會稽の耻を雪ぎたい。
未だ全癒の身では無いが、一日も早く出征したい。
ナカ／＼許されない。

四十日間。徒に新兵の補助演習や、新馬の調教や、捕虜見物で

暮らした。

命令

五月廿日 待ちに待ちたる近衛騎兵聯隊へ、分遣の命令が出た。野戦馬廠の補充だ。

習志野の戦友に別れ、同行三人で氣樂の旅だ。津田沼から汽車で兩國へ着いた。麴町の聯隊に正午入隊して、戦時服や武器を受取つた。

十年の昔

顧みれば此の兵營に二ヶ年の現役を務めて、雪に泣き、汗に苦んだのは已に十年の昔となつた。

轉た懷舊の情に禁へぬ。

再征の祝杯

翌日、武器の手入を済し外出して、學友であつた森下主許を訪ひ、別を告げ、義弟栗原の下に寄つて、再征の祝杯を舉げて歸營した。

廿二日 早朝、高田學兄は餞別に來られ末廣を送られた。文

いざらば、ツラルの山の彼方まで。

光

同行十人と決定して、午前七時、電車で品川に行き輸送部に到着を届けた。

正戦兵

停車場へ熊倉唐麓氏が駆け着け、餞別として『正戦兵』と大書した菓子袋を贈らる。中に鹽せんべいが這入つて居る。時節柄面白い。俳人はナカ／＼考へた物だと感心した。

十一時 汽笛は響いた。萬歳の聲は轟けり。肺肝より迸る國民の聲！

出發

波靜かなる品川灣頭、近衛師團一千餘の補充兵を載せたる長蛇は動き出した。

廿三日 米原に着いた時、捕虜列車は北上した。我は前途の功勳を夢想して戦場に向ふ。彼は苦戦悪闘力盡き、敵國の浮虜となつて耻を異域に墜す。胸中の差果して奈何ぞや。

大阪で、白衣の傷病兵列車に遇ふ。

浮世かな、來たる燕に歸る雁。

廿四日 午前九時、廣島に着。

廣島商人の機敏なるには驚いた。兵隊が宿舍する瞬間に、露店が軒を列べて、軍用雜貨を販賣する。

大風呂敷を負うて、宿舍の樓上まで來て、端書や、賣薬や、飲食物を押賣りする。機敏と謂ふよりは寧ろ横着だ。狡獪だ。甚敷は春書を公然押附ける奴がある。

廣島

廿六日 細雨を犯して宇品灣頭に到る。

廣島中央馬廠に居る、知れる三四の戦友は、僕等を見送る爲めに來て居た。深く高情を謝し、無限の感慨を抱いて、短艇に乗り、鹿古島丸に移つた。

僕は又

『古來征戰幾人か回る。』

を幾度か微吟した。

帝都を發車し、廣島に着する沿道の歡送、昨年 compared なら、寂莫たる者だ。アトテは破れ。國旗は裂かれ。義理一片の少數の見送人に恤兵品。狂喜狂熱を祭り騒ぎの國民も、年餘に涉つて倦憊して厄介になつたのだらう。

けれども、草苳る男、田を耕す女、老も若きも、軍隊列車の通過を

鹿古島丸

倦憊せる國民

見れば笠を脱し、手拭を振り、熱誠を以て送るは、昨日も今日も異らない。

華美なる偽善の歡送は、楳花一朝に萎んだが、赤心熱誠のこの見送りは、戦争の終局まで續く事疑ひ無い。これ實に舉國一致だ。

僕は虚榮の都の人は厭やだ、此の朴直なる田舎の人が好きだ。

第三十二 航路危険

廿七日 馬關を越えて、餘程走つた頃だ。船は急に一回轉して、全速力で門司の方向へ逆航する。何が何だか僕等には判らない。

船員の言うに、沖の島の此方で、哨艦の任務に就ける和泉艦か

ら、信號を受けた

『航路危険背進』

此の船も、今三四時間も早く進航したなら、バルチック艦隊の包圍攻撃に遭遇して、武装なき運送船の、見る／＼海底の藻屑となる。危機。間髪を容れずと驚かされた。

夕刻、門司を後に十里も戻つて碇泊した。

昨春、常陸丸遭難の折も、此處まで逃げ歸つて航路の安全を待った。吁、記念すべき我が宿縁の地、長へに波靜かなれ。

今亦虎口を脱して此地に歸る。

嗚呼、天祐である。神や佛の加護であらう。

廿八日 午前報告船が來た。小さな蒸氣船だ。一人が甲板に立つて蓄音機の喇叭の様な者を口に當て、遙か遠くから怒

鳴る。

『昨日敵艦四艘を撃沈し、昨夜夜襲を強行して二艘を沈め、今朝又二艘を撃沈す。』

甲板上に蟻集した各人が、萬歳の聲は地軸も破れん計りに叫んだ。

西の空は赤く鏡の様に、波靜かなる夕刻、食後て甲板は賑つた。又報告船が來た。

『追撃中の我艦隊は、只今敵艦一艘を沈め、驅逐水雷艇一艘を沈め、北方に向つて急進中にして、其効果は著大なり。』

再び萬歳の聲は、筑前岬の波に眠れる水鳥を驚した。

廿九日 滯船命令を待つ。

午前、福岡日報の號外が來た。鹿古島丸に関する記事がある。

乗て居る人よりか、新聞の方が委しい。戦争なども戦ふ者よりも、新聞の方が却て面白く書く。

『廿七日沖ノ島海戦ノ當日ニハ、門司ヨリ西行シタル運送船四艘アリ。其内二艘ハ戰場ニ近寄ヨリテ六連島ニ引回シタルガ、當船員ニ付語ルヲ聞ケバ、鹿古島丸ハ廿七日午前七時門司ヲ拔錨シ、一時六連島ニ停船シ、續キテ西航セシガ沖ノ島北方七里地點航行中、哨艦某ヨリ左ノ信號ヲ請ケタリ』

『敵艦見ユ、汝ハ危險ノ域ニ進ミツ、アリ南方ニ引回セ』
依テ本船ハ速ニ急行六連島ニ引回セシガ、其際前方遙ニ廿余艘ノ軍艦アルヲ見タレド、彼我何レノ軍艦ナルヤ判明セズ。依テ歸航中午後一時廿四分ヨリ三時二十分迄砲聲ヲ聞キシガ、其距離ノ次第ニ遠ザカルト風波ノ爲メ船體ノ動

搖セシトニテ聞ク能ハズ。

獨リ疑問ナルハ〇〇(門司)丸ハ〇〇ヨリ〇〇師團ノ兵員約
〇〇名ヲ搭載シテ門司ヲ拔錨シ、六連島ヲ發シタルハ廿七
日午前六時十分ナリシガ、今一時間早カリセバ敵地ニ逸シ
タルヤヲ知ラザリシ。

鹿古島丸ガ某哨艦ヨリ信號ヲ請ケシ際、前方遙カニ航行ヲ
續ケ居リシハ〇〇丸ナランカ。

同船ハ其進路ヲ壹岐ノ方向ニ取リタレバ、何レ安全ナラン
ト信ス』

門司丸には習志野から輜重監視隊に行く、知れる騎兵が十余
人乗組んで居る。一寸氣に懸る。

午後六時 　また報告船が來た。

『敵艦十三艘を撃沈し、六艘を捕獲し、婆艦隊は全滅の姿とな
れり。』

輸送指揮官は、全士卒を甲板上に集めて萬歳を三唱した。此
の號外を握つた日本全國民の狂喜は如何であるう。

三十日 九時出帆。馬關海峡を過ぎ、午後一時沖ノ島に到る。
我が艦隊は戦闘體形にて盛んに遊弋して居る。

水雷艇の如きは得意げに、わざ／＼我が船に近寄つて、萬歳を
叫ぶ。

我も亦萬歳を唱へて、感謝の意を表す。

昨日の砲煙彈雨の劇戰場、今日は萬歳を唱へて波靜かに縫う
て走る。

僕の如き海に於ける非戦闘員も、意氣天を衝くの壯快である。

濃霧

大角力

況んや海軍諸君の得意は幾何であらう。
三十一日 夜來船の動搖烈しかりしが、夕刻稍と静穩になる。
六月一日 濃霧の爲め、船の進航は止め、鎮南浦沖に停船した。
濃霧。實に恐ろしい。船尾から船首は到底見えぬ。十歩の先の人が判らない。嘗て上村閣下が濃霧の爲め面白からざりし世評が有つたが。鬼神てさへも、此の濃霧には如何ともする事が出来ない。
船中無聊の餘り大角力を始めた。
龍闘虎搏互に火焰を吐いて闘つた。猛烈なる其勢に、さしもの濃霧も追付け晴るゝだらう。
二日 霧稍と薄し。進航を始めた。午後は一點の雲なき日本晴れとなつた。

第三十三 大連の夜

美観

上陸

松原館

夕陽遠く水に沈んで暮色蒼茫。一陣の涼風征衣を拂ひ、鐵欄に凭つて熟視すると大連の山岳が見える。船は次第に進んで、左にダルニの市街を眺めた。家には燈火搖曳。天には星斗燦爛。薄暗の中に電燈の煙筒が天に聳えて居る。幾多の巨艦から青い赤い色々な燈火が見える。
夜の港内はテカ／＼美観である。
三日、大連築港へ船は横附である。午前九時から上陸を開始して、午後二時人馬悉皆終了した。
碇泊所から約五丁の松原館に宿舍した。
此に夏目館、松原館と謂ふ軍隊宿泊所が二軒ある。各二三千

洋服の乞食

大連發達せる

人は容るに足る巨館だが、内地の旅館だと思ふと大間違ひ。疊もなければ、火鉢も無い。手を拍つたからとて犬でも來ない。只アンペラの上に寐轉んで雨露を凌ぐ計りだ。三度の飯は遠く半里も、歩兵の炊事所へ飯盒さげて貰ひに行くのだ。差當り洋服の乞食だ。

午後大連市街を散歩した。

當地の開けるのは實に長大足だ。約半年間に見違へた。幾百の倉庫は出來た。東の山麓には宏大なる病院が普請中だ。碓泊所附近の糧秣の潤澤なる、幾千の天幕の下に積み重ねたる山岳の如き、米麥、罐詰。

これが八月以降の分だと聞いて、更らに一驚を喫した。

其他徴發の車輛が幾山となく有る。これが何時消耗するだ

らうか。

支那町

支那町の十字路は、淺草公園の様だ。路上に手品師や、講談師、福引など盛んに客を呼んで居る。商店も軒を列べて雑踏して居るが、比較的清潔だ。

大連から毎日補充として上陸、戦地に向ふ兵員は、一日平均二千人を下らないと云ふ話だ。

祝捷會

六月四日 大連官民合同の海軍祝勝會で、全市支那町に至る迄、日章旗を翻して夜は提灯行列、山車が出る。軍隊の素人芝居が大仕掛に始まる。花火は揚る全市、破れん計りの盛況だ。見るに付けても、内地は如何であらうと、また直ぐと追想する。

ガルニ公園

五日 乗馬でガルニ公園に遊び、開戦の初、柔順鳩の如き我が日本婦人は、暴虐狼の如き露國士官に虐遇せられ、猛虎の餌

食とされたと謂ふ噂の高い、其虎を見物した、外に大きな熊も二三疋居た。

六日 大連停車場から七時三十分發車した。

現役當時喇叭長て居た、名は忘れたが特務曹長て大連の司令部に居る、ワザ／＼見送りに來て、煙草を二個宛呉れた。有難く頂戴した。

雨は降り出した。車外の景を眺むる事は出來ない。有蓋荷車だ。窓は無い。南山、普蘭店、瓦房店、得利寺などの新戰場なる停車場を過ぐ。時々扉を僅かに開いて外を眺める、中にも龍王廟は騎兵十三聯隊の初戰場で、野村少尉以下六十余名の死傷を出した處で、線路の傍に墓標がある、心靜かに默拜した。熊岳城、蓋平、大石橋は夜て翌朝遼陽に着いた。三時間停車時

間がある。遼陽の市街を散歩し、再び上車十一時烟臺停車場を過ぐれば、一望千里の大陸的平原だ。渾河の大鐵橋は、敵が破壊して退却したのを修理中で、徒歩て假橋を渡り。三時奉天に着き。更に奉天の城壁を南に瞥見しつゝ進んだ。

ア、此の平原。奉天戰の際、我軍が一瀉千里の勢で追撃した處だ。掩堡の跡や砲彈の落ちた跡が、歴々として判る。

從弟奥澤豊三君は、此處で玉と碎けて九段坂上の花となつたのだ。此處にも彼處にも墓標が林立して居る。十字架もある。敵も味方も幾多夏草の肥と成つたのだ。

儘になる身なら、墓を尋ねて花を献じ水を澆いて、其靈を慰むるのであるけれど、仕方がない。

走る汽車の戸の透間から僅に首を出して念佛申した。ハン

河の鐵橋も、渾河と同じく、破壊不通だ。假橋があつたけれど、兩三日前の洪水で流失したから、徒渉して汽車を乗換え。午後九時三十分。鐵嶺に着いて、間の鐵嶺の町を引回されて、一時頃宿舍が見附かつた。

第三十四 徒步行軍

八日 鐵嶺から徒步行軍だ。昨夜細雨が降つた。道路は塵埃を揚げないで至極宜いけれど、僕等乗馬隊が軍刀は提げる、銃は持つ、荷物は負ふ。而して歩兵と同一の行軍は、ナカク骨が折れる。馬家寨の兵站司令部に着宿した。此處に近騎の戦友が居て、色々盡力して呉れた。翌日は疲勞して行軍が出来さうも無い。司令部に請求して、

支那馬車壹輛を雇ひ、十人の荷物と僕と外三人が乗つて、目的地の柴河堡近衛師團司令部へ午前に着いた。司令部在勤の川田藤吉氏と會つた。顧みれば八家子の雪の中、堅く手を握つて明日も知れない戦場の命、涙で別れて此に半年。僕は故山の土を踏んで再び出征し、無事な君の顔を見た時は、言葉も出ない。先立つ者は、唯嬉し涙だ。此夜は一夜を語り明した。

十日 歩兵に別れた。僕等は僅かに十人組の獨立隊だ。午前八時出發、午後六時着。里程約三里。一步一休、荷物の爲めに疲勞が甚しい。撫安屯の司令部に泊つた。此處にも知れる五六人の戦友が居て、翌日は僕等の爲めに荷馬車を周旋して呉れた。持つ可

きものは友である。

十一日 崖陣堡なる輜重兵大隊に到着を届け。野戦馬廠に編入した。戦友は多く是れ舊知の人。何となく力強く、且心懐かしいものだ。

宿舍の前に小河が流れる。柳は茂つて枝が垂れて居る。水は濁つて居るけれど、魚は多く居るさうだ。誰が太公望さめたのか。釣竿が宿舍の前に建てかけてある。

此處が僕の住居となるのだ。憎くない處だ。

野戦馬廠の任務は。東京の補充馬廠で内地の新馬を徴發し多少調教し、戦地の豫備馬廠に送り届ける。此處で若干調教して、當野戦馬廠に移すのだ。此處稍々完全に戦役に耐ゆる様に訓練して、戦地の各隊に補充する、所謂後方勤務だ。飛弾

爆鳴を冒し勇進する機會は稀れだ。

第三十五 左劍右筆

右の山は禿山にて草樹なし。左の村落は土壁の家屋。戀しき懐かしき母國に似た様な處は一つも無いが、夜間の大空のみは星あり。月あり。雲あり。故郷の空と變りは無い。

毎日一二時間の乗馬演習で、晝寝専門の生活。ソレでも満足が出来ぬのが人間の貪慾。

野戦隊の勤務が命が惜しくとも面白く戀しく。此の無趣味の勤めが如何に樂ても厭になつた。

元來人間は自分の境遇には、好くも悪しくも満足しないのが

原則だらう。

○ 鳩車の友、矢澤君は僅か一里の南方に居る。莫逆の友、佐瀬君は西方一里に居る。一日も早く快談したい。

○ 最先線とは二十里も離れた後方だ。砲聲も聞えない。何だか戦争の様な感じは起らない。

○ 況して媾和の風説などを聞くと、今にも戦争が終局になる様に思はるゝ。

去る者は疎し

○ 馬廠附の過半は、昨年二月鎮南浦上陸の兵だ。一年半も故郷の風に離れては、初め程戀しくない。長く居る程懐郷の情が

薄くなると謂ふ。或は左様かも知れない。去る者は日々に疎しだ。

休戦の際

○ 廿日 兵器掛の砲兵中佐殿の、武器馬具の検査があつた。日清戦争の時は、武器検査が有つて、二ヶ月の後休戦となつた。

○ 北清事件の時は二十日にして休戦となつた。

○ 武器検査は、休戦準備の端緒だと、一犬虚に吠え、萬犬實を傳へて大に騒ぐ。

○ 前途は遠遠だ。到底信じられない話だ。

○ 廿一日 昨年の本日は南尖上陸の日だ。初めて東亞の大陸に足を踏みし記念日。光陰は矢の如く、早くも此に一回轉。

○ 僕の目的は徒に齟齬して、身は再び征露の軍にあれど、勳功昇進の野心は零だ。萬事此れ天命。僕は只天命に従ひ、此の殘

上陸の日

骸を粉骨瘁身國に盡すの外に道はない。

廿三日 下野新聞社から恤兵手拭を贈られた。郷里に縁故ある恤兵品は、品物の如何を問はず、嬉しい。戦友の仲間にも僕の郷里は斯様だと。虚榮心では無いが、鼻が高い様な気がする。新聞社へ禮狀を送つた。

今回、僕等が敬愛する縣下の有志諸君が、年末年始の費用を節約して、貴社の手に依つて贈られた手拭を、正に難有頂戴した。

ア、此の尊き手拭。僕は徒に顔の汗や、背中の垢を拭ふに忍びない。何となく無下に親しい。僕は此の熱誠の込める手拭で、銃の袋を作つた。

滯營の時。僕の魂たる銃は。蠅も集らす塵も附かず静か

に此の袋の中に休養して居るが。イザ戦闘と謂ふや、捲土重來の勇氣で其任務に就く、其折此袋は、堅く僕が腰に巻き附いて、負傷せし場合に繻帯となる責任を以て居る。此の袋を血汐に染めて、諸君の熱誠に報ゆるの機會も、又近く來るだらうと信ずる。

滿洲の名物。夏季に於ける蠅も確に名物の一ツだ。

安東縣、鳳凰城附近も可なり驚く程居つた。何十里北方に進んだ此處にも劣らず居る。

大隊では、懸賞法で蠅征伐を始めた。曰く

蠅貳合に付、ソリ(五錢烟草)一個と交換。

外に福引券一枚、月末抽籤で一等貳圓五拾錢以下十數等に別ちて賞を與ふ。

昨今これが爲め、新に蠅取器の發明と、製造に苦心して大騒ぎだ。

蠅も大なる恐慌が來た。

一軒て一日壹升位は容易だが、五六日の後は、蠅軍も無盡藏の補充兵は來らず。全滅とは謂はないが、殆んど室内に居らぬ様になつた。

風鈴

ピールの空瓶を半分から切つて、風鈴を作る。

其音が如何にも涼しげだ。厭や／＼な驢馬の泣聲の中に、此風鈴の音のみは日本的だ。況して母國から僕等と同じ船路で來た瓶だと思ふと。更に因縁が深く一段の趣味がある。此の音を聞きながら晝寢をする時ほど爽快の心持は無い。

第三十六 炎塵涼思

廿八日 晴天暑氣非常に烈し。

耐へ難き暑さ忘れし浴、揚りに

舌打ちならず恤兵の酒。

見渡せば一望千里高粱の

青葉を渡る風の涼しさ。

唐澤の峯の上より出る月も

此の戦さ場の月も同じき。

風鈴の音を聞くだにも想はるゝ

今古里の夏は如何にと。

米の價も知らず戦地に暮らす身は

浮世の外の香気者かな。

大名生活

副食物も後方部隊で便利は宜い、罐詰などは僅少だ。白菜、葱等の野菜の青々したるに、牛や豚の鮮肉が澤山渡る。鶏卵も毎日二三個位は分配されるけれど、半分は腐敗して居る。普通の味噌もある。梅詰の醤油も有る。

昨夏、第一軍の右翼で減食又減食。三合の米と梅干で一週間も糺いだ時を追想すると、乞食生活と、大名生活程の相違がある。

支那農民

支那農民の勤勉なものには驚く。星を戴いて起き。星を戴いて歸り。孜々として耕して居る。

支那人は怠惰な横着の民だと謂ふけれど決して然て無い。

特に僕の感心したのは少年の勤勉だ。日本でも九歳十歳の男子は、徒ら盛りて、跳ね遊んで居るが。彼等は父兄と共に田野に曝らされて、牛馬と共に其勞を争うて居る。

婦人も家務に當り奔走して、徒食は決してしない。

清國は此の如き勤勉の民と、曠漠なる沃野とを有しながら。

猶且衰亡に傾けてあらうか。

清國は何處でも、男よりも女が、夫よりも婦が、權力を有して居るのが事實だ。

支那婦人

これは男の數よりも女が少ないのも一大原因だが。また夫の年より妻が三四歳は多いのが通例ださうだ。これも原因の一ツであらう。今一ツ最も注意すべきは特に徳操の貞淑なることである。

青春の焰燃ゆる計りの百萬の日本兵隊が居るのに、飽種が更に絶無だ。これ嘗に我が日本軍人の紀律が正しい計りではない。これに比すれば、日本婦人の三面種の盡きぬ破廉耻。寧ろ泣きたくなる。

昨年と本年
昨年の今頃、遼陽附近で三錢の煙草が十二三錢もした。當今酒保で、五錢の巻煙草が三錢五厘だ。

その高いにも驚いたが。又安くなつたにも驚く。

三本の扇
七月五日 恤兵部より扇壹本。讀賣新聞社から壹本。隊長から壹本。都合一時に參本の扇を給與された。滿洲の暑氣も何のそのだ。

毎日暑氣が烈しいから。早中食で、四五時間も晝寝する。夜は眠れない。

毎夜雑談に時を移して、床に就くのは十二時頃だ。其間は實に愉快の時、互に國の自慢話や、戦争の終局論に口角泡を飛するのだ。

風鈴の音
家屋は不潔の支那農家でも、明け放いた窓から颯と吹き込む夜風の涼しいのに、空瓶の風鈴が丁東々々と涼しい音がする。心が爽快で仙境に遊ぶ様だ。住めば懐かしい此處も、都の我家である。本日大隊が勸進元で、大角力の興行だ。五六日前から小屋掛けや、土俵などの準備をした。各部隊から部隊を代表して選抜された、一騎當千の豪の者が集まつて。龍攘虎搏必死の勝負だ。

大角力
應援隊の彌次馬は、勝負毎に、鬨の聲で應援をする。東京の本場所よりも快観であつた。

宿舍の前の小河に籠が接む。此頃砂上に來て卵を孵化する期節で、支那人が三疋獲つて來み。貰つて料理して夕食の膳に上せた。

戦線に在る豊田君からの手紙の中に。

寄君

死生契りし我が友と

戦さ休みの徒然に

駒をば野邊に遊ばせて

青葉の下に嘯さぬ

圓球此に一回轉

砲の響きは暫し止み

南窓の下涼しくも

君なき今日を如何にせん。

九日 毎日話題は媾和と凱旋で持ち切りだ。

青葉より吹き來る風のそれよりも

媾和の風のいと嬉しき。

筒の音聞いて暮らすも今しばし

勝ちどき揚げむ菊月の頃。

夢路にて遇うて笑むのも今暫し

真近く歸る戈を納めて。

第三十七 雨中の前進

吳家堡

土人形の行列

十一日 夜來大雨、午前六時雨を冒して出發した。鐵嶺の西南二里の村落、吳家堡に着いた。行程四里だが坂が二ツある、師團全部の移轉だから、道路の泥濘は、壁にする土の様に捏ね返した田の中を行くやうだ。馬も人も尻から頭まで泥だらけて、宛然土人形の行列だ。

泥にころもは染まりしとても

清い心の日本兵。

國の爲めなら薪に臥す身

泥を喰ふとも厭やせぬ。

前進

嬾と疊は新らしきに限る諺はあれど、戦地の宿舎は前進するに限る。

新宿舎の裏の畑には胡瓜、葱、茄子等が青々と茂つて居る。二三日の中にこれが全滅するかと思ふと恐しくも亦心細い。東も西も北も遙に低い禿山が繞つて、南は平坦で一望千里の沃野で、大豆と高粱で青海の様だ。

遼陽に行く汽車が東を走る。遼河を上る白帆が西の青葉の

雑樹林を縫うて行く。清楚たる風情は眞に心地好い。

起きて食ひ食ひては寝ねつ戦さ場

夏の暑さを過ごす呑氣さ。

○ 緑葉影濃かに 夏の日長し

芳草豊かなる 清流の邊

無念に草飼ふ 軍馬一頭

傍に眠る 長劔の兵

○ 夢は那邊に 彷徨しつゝ有る哉。

そよ／＼と柳の枝に音ぞして

窓に吹き込む月の下風。

鍬を捨て劔にかへてしこ草を

刈る可く上り此に一とせ。

遼河をば上る白帆のほの見えて

青葉を渡る風の涼しさ。

松川氏

松川氏から文の中に。

武装して駒立てなほす益良夫の

征途三千露消えて行く。

第三十八 悲憤臥病

十五日 大打撃は僕が頭上に復た落ちた。

入院

脚氣再發の氣味で、診察を受けたら、明日入院の宣告だ。重ね

くの耻辱、大耻辱。吁、千秋の大耻辱。

僕は左程に重患とは思はないが、醫官の命令には服従せねばならぬ。

悲憤

ア、僕は血を吐く思ひである。

明日は遼河の白帆見ゆる、涼笛の聞ゆる、胡瓜や茄子の茂れる、懐かしき此の宿舎を棄てねばならぬ。

着隊以來日は猶ほ淺くして、生死誓つた親しき戦友と別れねばならぬ。

毎晩一杯の酒に陶然として、無邪氣に謠ふ戦友の軍歌も、今宵が聴き終めかと想ふと、萬感潮の如く轟々と、小さき胸に湧いて坐に身の不遇を嘆じた。

不遇の身

何事も運に任せて眠るのみ。

御國の爲めに捨てし我が身は。

何となく思ひ亂るゝ此の夕

枕に泌むる虫の聲かな。

煩悶に苦しむ我れは終夜

あかつき近く吐血鳥鳴く。

飯塚君

十六日 章家窩棚患者療養所に入る。

同窓の學友飯塚君が脚氣の爲め入院して來た。眞に奇遇だ

同病相憐み同氣相求む。大に力を得た。

門前を抱擁して、珍らしく黄色な麥畑があつた。

八月六日 鐵嶺の兵站病院に移された。

鐵製の寢臺はある、蒲團もある、枕もある、牛乳もある。内地の

病院の様に整頓して居る。

鐵嶺病院

鐵嶺の塔は青葉をつらぬきて

涼車の煙は低く棚引く。

故郷に歸るこゝろは勇めども

いさほ無き身のいと悲しき。

儘ならぬ浮世に我は嘆かはじ

人間萬事塞翁の馬。

泣く虫に哀れ添へけり病院の

燈火消えて雨細う降る。

大連分院

奉天、遼陽の各病院を経て十日大連第二分院に收容せられた。

大連を見る事、實に三回。日に進み月に歩む繁榮に驚く。此

春上陸の折は婦人の影も見えながつたが、今や醜業婦の頭數、

千を超ゆと謂ふ。

洗濯屋の屋根に、仇つばい婦人の着物が、翻々として居た。彼等の職は無論賤む可きも、其勇氣や堂々五尺の男子に劣らない。其大膽と勇氣とは賞賛する。

十二日 病院船琴平丸に乗込み、十五日宇品に着し。身は再び母國の地を踏んで廣島病院に入つた。

○媾和成立を聞きて

病は癒りもとの身に

三度上らむ征露の途

平和の風を如何にせん

バイカル湖の秋の色

ウラルの山の六ツの花

眺むるすべは断られたり。

東京氷川分院に移り。再び歸郷疾養に、山蒼く水清き故山の一家團欒の人となれど、悲喜交々起り、徒に胸のみ悶き。轉た熱涙憤涙に堪へない。

第三十九 媾和成立

媾和は確實に成立した

三度戈を磨いて、征露の途に上り。我が重々の耻辱を濺いで同胞に謝するの時機は終に逸した。又流星光底長蛇を逸したの遺恨がある。

千載一遇の日露の大戦役に参加せし僕は、只病院場裡て病魔と苦戰奮闘せしに終つた。慚愧々々

郷里幾多の戦友は、偉大なる功勳を帯びて、右と左に名譽と權威とを提げて、意氣天を衝く。勇まじき風丰。熱烈なる國民の歡呼の聲を聞きつゝ、病骸を家郷の一隅に横へて。夢徒らに功勳を貪つて居る。

斷腸

斷腸！斷腸！悲憤の涙、乾く暇なく病衣を沾ほした。

毀譽褒貶は身から出た錆。元より頓着はせないが。天は何故に斯の如き不遇の運命を以て、孤影孑然たる僕を制するてあらうか。我。宿世何の業障かある耶。限りなき佛陀の慈光。亦我が上を照さざる歟。俯して恨み、仰ぎて訴ふ。小さい心いよ／＼切也。おゝ我が佛陀よ！

十二月五日 其筋より

功七級金鷄勳章及白色桐葉章
を拜受した。

僕は夢かと疑ふた。手は、わな／＼と震つた。寸功無き僕。又此の破格の恩典に預からんとは。

同情深き戦友諸兄。信愛厚き郷黨諸氏。その熱き後援と庇護とに依ることを、僕は偏に感謝す。諸君の高恩。僕、謹んで之れを慕く。謝するに唯涙あるのみ矣。この心、我永遠に忘れじと誓ふ。(をばり)

從軍日誌

明治四十三年十二月十三日印刷
明治四十三年十二月十六日發行

(非賣品)

著述
兼發行者

久保欣一

印刷者

東京市京橋區西紺屋町廿六七番地
太田音次郎

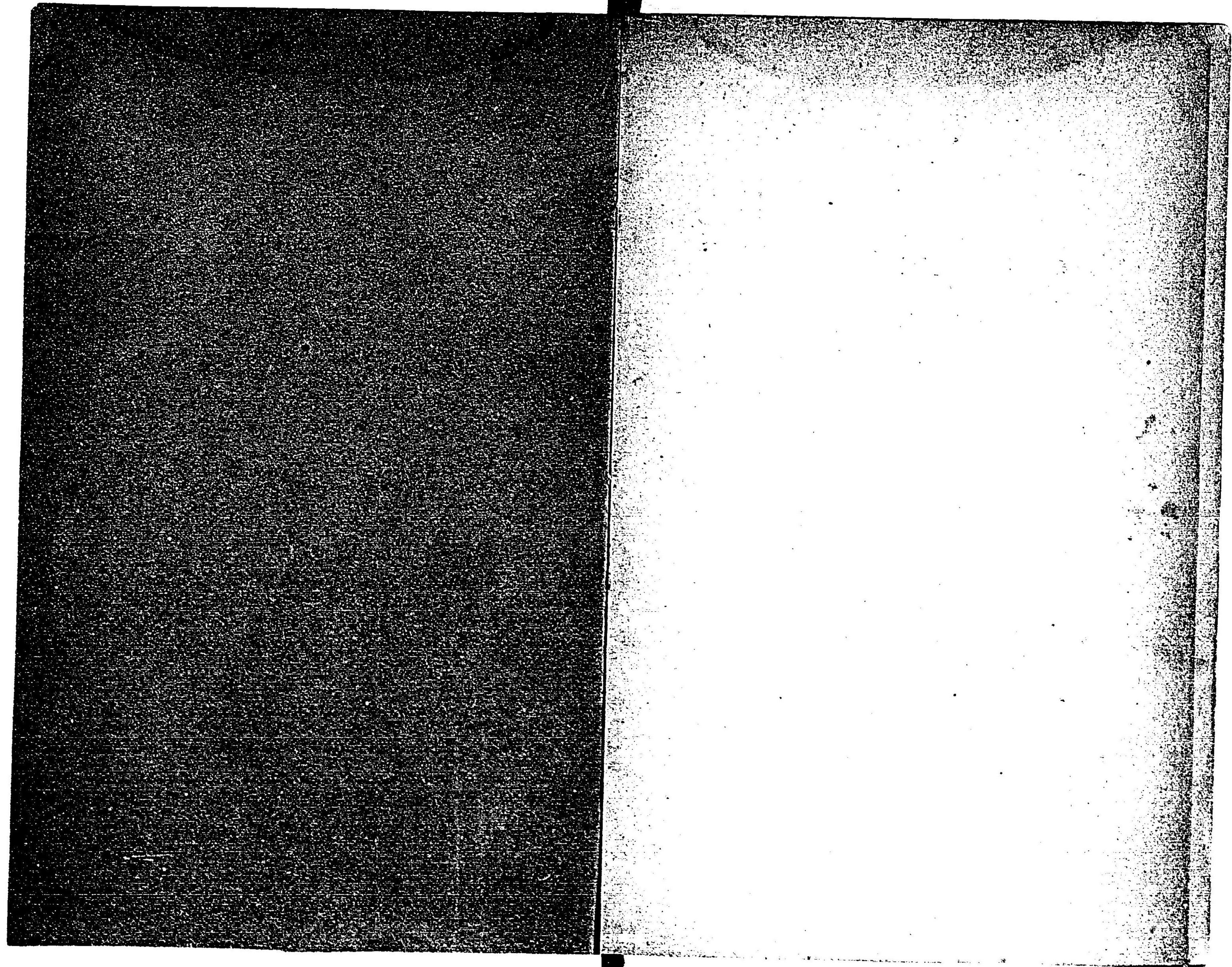
印刷所

東京市牛込區市ヶ谷加賀町一丁目
十二番地
株式會社 秀英舎第一工場

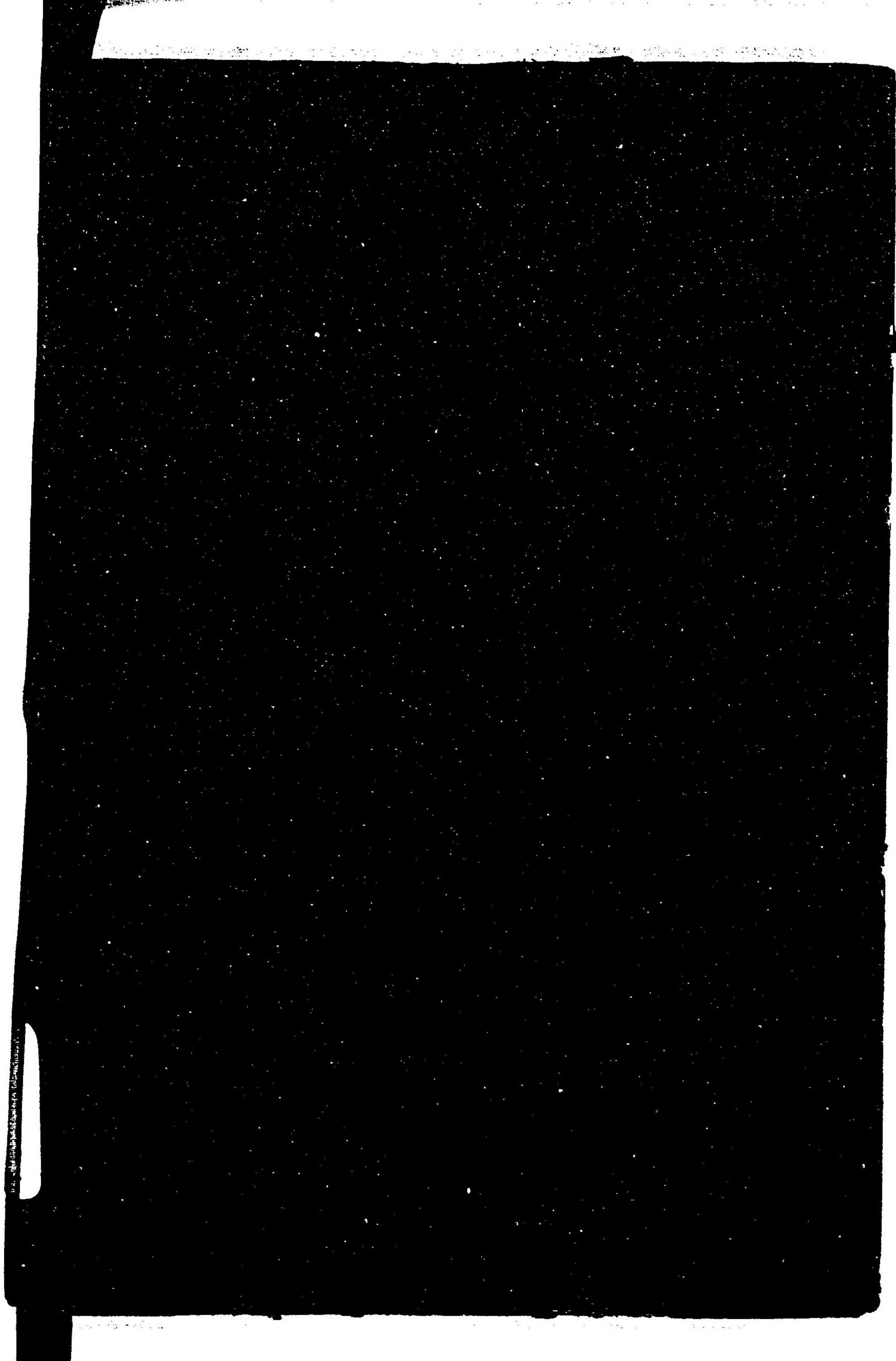
發行所

東京市芝區露月町十八番地
鴻盟社
(振替東京貳九七七)

不許
複製



27
282



21
282

002745-000-6

21-282

從軍日誌

久保 欣一/著

M43

ACB-6205



